

令和4年4月1日
鹿行農林事務所経営・普及部門
(銚田地域農業改良普及センター)

低温・晩霜対策について

今週末にかけて気温の低い状況が予想され、晩霜被害の恐れがあることから、気象災害対策情報を作成いたしましたのでご活用ください。

低 温 対 策

I 水 稻

低温による出芽不良、育苗期の病害発生を回避するため以下の事項を徹底する。

1 出芽について

- ・出芽適温は28～30℃である。ハウス内での積み重ね法や平置育苗法では、低温に遭遇し出芽期間が長引くとリゾープス菌による苗立枯病が発生しやすくなるので、保温性の高い被覆資材を使うなど出芽温度の確保に努める。

2 育苗期間の管理について

- ・10℃以下の低温に遭うとフザリウム菌、ピシウム菌による苗立枯病、ムレ苗が発生しやすくなるので、保温性の高い資材で被覆するなどの保温対策をとる。

II 野 菜・花 き

1 露地・トンネル栽培

- 1) 早播き、早植えする場合は、日照、地形を勘案し、凍霜害を受けにくい場所を選ぶ。
定植は気温が安定している時を見定めて行う。

- 2) 播種、定植後は、トンネル被覆やべたがけなどを行って被害を回避する。

外気温が-3℃程度に下がる場合、トンネル被覆だけでは-1～-2℃程度となり、被害を受けやすい。晴天無風の場合は放射冷却により、より温度が下がる。

トンネル内にべたがけ資材を使用すると2℃程度高く保温できる。低温が予想される前日の夕方は早めに密閉する。

トンネル設置ができない場合、べたがけ資材の被覆のみでも、ある程度の凍霜害軽減効果は期待できる。

べたがけ用資材例：ベタロン、バロン愛菜、マリエース、パスライト、パオパオ等

※ 通気性が良く、熱放射透過率が低い資材が良い

2 施設栽培

- 1) 夕方は早めに密閉し、可能な限り内張り、トンネル、及びべたがけ資材を活用して、施設内の最低気温をトマト、イチゴは5℃程度、メロン、ピーマン、キュウリ、ナス、スイカは10℃程度を目安に確保する。
- 2) 暖房機を設置している場合は、燃料、電源などの点検を事前に行っておく。

3 品目別

1) 春メロン

- 低温に備えて、日中の温度を確認しながら、午後早めの時間帯にハウス及びトンネルを密閉するなど、夜間の温度確保(最低10℃以上)を優先した保温管理に努める。
- 着果から摘果前までは、夜間気温の低下が予想される場合は、直前のかん水を控える。
- 硬果～ネット発生期を迎えたハウスは、トンネルの閉め切りにより湿度が高くなると、ヒルネットの発生が心配されるため、曇雨天の場合でも日中の温度を確認しトンネルを開け、1日1回程度湿度を抜く。
- 低温に遭遇し草勢が弱い場合、NPK入りの葉面散布等により生育を補完する。

2) アールスメロン

- 低温に備えて、日中の温度を確認しながら、午後早めの時間帯にハウス及びトンネルを密閉する。

3) ピーマン

- 無加温の場合、日中の温度を確認しながら、午後早めの時間帯にハウスの多重被覆をするなど、夜間の温度確保(最低10℃以上)を優先した保温管理に努める。
- 低温に遭遇し草勢が弱い場合、NPK入りの葉面散布等により生育を補完する。また、早めに収穫することで着果負担を減らし、草勢の回復を図る。

4) トマト・ミニトマト

- 低温に備えて、午後早めの時間帯にハウスを密閉し、夜間の温度確保(最低5℃目標)に努める。
- 低温で主枝の生長点が枯死した場合、生長の早い腋芽を伸ばし主枝とする。
- 被害がひどく回復が見込めない場合は、早急に苗を確保し植え替える。

5) カンショ

- 夜間低温になる場合は、苗床のハウス・トンネルを閉めて温度を確保する。ただし、日中気温が上昇するため、トンネルの開け忘れに注意する(日中25℃目安)。

Ⅲ 果 樹

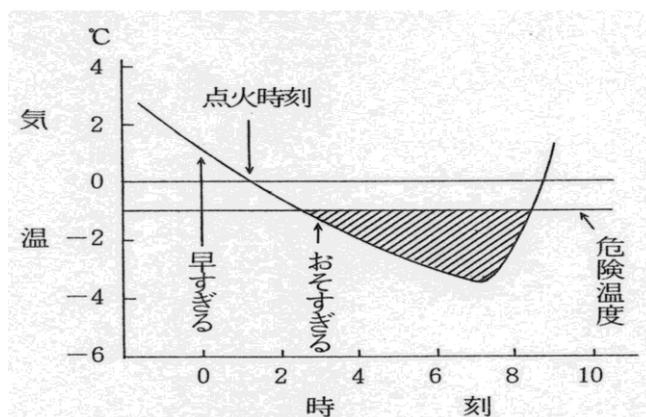
翌朝の予想最低気温に注意し、燃焼資材等の準備をしておく。

1 多目的防災網の利用

開花前に網を展張し、サイドは開放して晩霜や降雹に備える。0.5℃程度の昇温効果がある。天気予報を常に確認し、網への積雪による倒壊に十分注意する。

2 燃焼法

石油半さい缶（芯にロックウール、灯油 5 リットル、20～25 個/10a 設置 ※火力が強いので特に平棚園ではふたを準備して火力を調節）、市販の燃焼資材等を用い、右図を参考に、0℃に下がった時点を目安に点火する。煙の発生などについては周辺環境に十分配慮する。



3 送風法

図 点火時期

防霜ファン施設のあるほ場では、防霜ファンのサーモスタット感温部は棚面（約 1.8m）に設置し、気温は 4℃で作動するようにセットする。昇温効果は 1～2℃程度であるので、外気温が -3℃以下に下がる場合は燃焼法を併用する。

4 地表面管理

わらマルチ、草生栽培は、土からの放射熱を抑えるため霜害を助長するので、マルチは危険時期（5月上旬）を過ぎてから行う。また、草刈りを励行する。

表 1 主要果樹の凍霜害危険温度（30 分間遭遇、℃）

種 類	発 育 ス テ ー ジ		
	蕾が色づいた時	満開期	幼果期
ニホンナシ	-2.2	-1.7	-1.7
ブドウ	-1.1	この時期の凍霜害はない	
カキ	-1.5～-2.0	この時期の凍霜害はない	
ウメ			-3.6～-0.3
リンゴ	-3.9	-2.2	-1.7
スモモ	-3.9	-2.2	-1.1
オウトウ	-2.2	-2.2	-1.1

晩霜で予想される被害と事後対策

区分	作物名	被害の予想、対策等
普通作	水稲	<p>出芽の不揃い(ハウスサイド寄り、入り口寄り苗箱の出芽不良)、生育遅延、葉先の黄変、苗立枯病の発生。</p> <p>(対策)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 出芽不揃いの場合は出芽の悪い苗箱をハウス中央列に移動するなど、並べ替えを行う。また、出芽前にリゾプス菌が培土表面を覆ってしまった場合には播種し直し等を検討する。 2 苗丈を伸ばすため、ハウス内の温度を高く設定したり、灌水量を多くすることは、病害やムレ苗の発生を助長するので行わない。 3 ムレ苗が発生した場合は、速やかに移植することが望ましい。移植できない時は遮光資材をかけて茎葉を湿らせる(床土に水をかけない)とともに根の保温に努め、回復を待つ。 4 苗立枯病(ピシウム菌、フザリウム菌)が発生した場合は、健全な苗箱を使って速やかに移植することが望ましい。直ちに移植できない場合は、登録農薬による処理を行い、苗立枯病の蔓延防止に努める。
野菜	カボチャ スイカ メロン (トンネル栽培)	<p>トンネル外のツル先、小型トンネルではトンネル内のツル先が褐変する。</p> <p>(対策)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 凍霜害を受けた日の日中は強日射を避けるよう遮光を行う。 2 病害の発生が懸念されるので、損傷部の除去や薬剤散布などの防除対策に努める。 3 草勢回復のため、葉面散布剤を散布する。 4 交配期前の場合は、被害に備え整枝を遅らせ、着果枝を確保する。
野菜	ジャガイモ (生育初期)	<p>茎葉が黒褐変・枯死する。生育初期では、わき芽が伸長し生育が回復するので収量への影響は少ない。</p> <p>(対策)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 病害の発生が懸念されるので、薬剤散布などの防除対策に努める。 2 回復後は、わき芽を2～3本に整理する。

	加工トマト (定植直後)	<p>茎葉が褐変・枯死する。生長点が被害を受けた場合、わき芽を活用することで生育は遅れるものの実害は少ない。</p> <p>(対策)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 病害の発生が懸念されるので、損傷部の除去や薬剤散布などの防除対策に努める。
	ソラマメ (開花、莢肥大期)	<p>葉および花卉の周縁が黒褐変する。</p> <p>(対策)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 病害の発生が懸念されるので、損傷部の除去や薬剤散布などの防除対策に努める。
	トウモロコシ (生育初期)	<p>降霜の程度により、葉先の枯死~地下部まで枯死する。3葉期頃では、生長点は地下にあり、地上部のみの被害なら回復可能である。</p> <p>(対策)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 地表下の生長点まで被害を受けている場合は、播き直す。 2 地上部が枯死乾固した場合は、切除すると新葉がスムーズに展開する。 3 霜害を受けた株は、茎が細くなりがちなので、肥培管理に注意する。
果樹	ナシ 花卉白色期～ 開花直前	<p>雌しべの柱頭から胚珠にかけて黒変し、着果しない。</p> <p>(対策)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 蕾や花を半分に割って被害状況を確認する。 2 被害を回避した花への人工受粉を徹底する。開花期の最後まで粘り強く人工受粉を続ける。 3 摘果は、被害が明らかになった時点で、結実状況をよく確認して丁寧に行う。被害が大きい場合、被害程度の著しいものから摘果し、被害の軽いものは摘果を遅らせて回復の様子を見ながら着果数を決定し、可販果実数をできるだけ確保する。
花き	キク (7月咲き =生育初期) (8月咲き =定植期)	<p>7月トンネル、8月露地栽培で心止まりや葉先枯れが発生する。</p> <p>(対策)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 新芽の発生を促進して回復を図るため、芽の整理や液肥の葉面散布を2～3回行う。 2 被害部分からの腐敗や病害の発生を防ぐため、被害部の切

		除や薬剤散布等の対策を行う。
--	--	----------------